

KYOKY

132

特集 学長就任の挨拶

特集 新図書館、建つ 附属図書館の歴史と増改修



京都教育大学

CONTENTS

広報第132号



<表紙> 附属特別支援学校高等部2年 海野匠未
<裏表紙> 附属特別支援学校高等部2年 奥田昌史

特集

- 2 学長就任の挨拶
京都を中心にしながら、
高い資質・能力を持ち自ら
研鑽できる教育者の養成
学長
位藤紀美子
- 4 新図書館、建つ
附属図書館の歴史と増改修
附属図書館長
太田 耕人

海外見聞録

- 10 イタリアの自由な気質
数学科准教授
深尾 武史

留学生の声

- 12 きょうから
日本語・日本文化研修留学生
モスタファ・ノラーン
(エジプト出身)

研究余滴

- 13 家族を超えて紡ぎ合うネットワークの構築
家政科教授 (家庭経営学・家族関係学)
杉井 潤子

京教今昔物語

- 15 京都教育大学、
オンリー・イエスタディ
社会科学科教授
田岡 文夫

京教学内探訪

- 17 学校園のための栽培園づくりと
つみきハウスの建築
産業技術科学科教授
土屋 英男



附属学校園だより

- 19 学校の文化環境
附属京都小中学校 (初等部) 副校長
戸田 和樹
- 20 日英サイエンスワークショップ (SW)
2013の取り組み
～グローバルな科学技術人材育成のために～
附属高等学校副校長
市田 克利
- 22 「働く」力を育てるために
～職場体験実習の取り組み～
附属特別支援学校副校長
高岸 正司

新任の先生から

- 23 子どもらしいものの見方、
考え方の世界を知りたくて
教育学科准教授
田爪 宏二
- 23 「声」という楽器
音楽科准教授
田邊 織恵
- 24 『学びと成長を大切に！』
教育支援センター教授
池田 忠

卒業生の声

- 25 向上心が自分を変える
滋賀大学教育学部附属小学校 教諭
橋詰 加奈
- 25 大学での自分自身を振り返って
ノートルダム学院小学校 常勤講師
大江太津志

ようこそ大先輩

- 26 思い出と近況報告
京都教育大学名誉教授
川口 容子

読者の皆さまへ・編集後記

- 27 地域連携・広報委員会委員長
細川 友秀

学長就任の挨拶 京都を中心にしながら、 高い資質・能力を持ち自ら研鑽できる教育者の養成

学長 位 藤 紀美子

京都教育大学の第Ⅱ期中期目標期間（平成22年度～平成27年度）の目標は、学部と大学院を見通した教員養成大学としてのあり方を構想し、具体化させることにあります。

本学では、第Ⅱ期の前半で、研究推進室の設置や副学長・学長補佐の配置、附属学校部や附属教育実践センター機構等の組織整備、法人運営連絡会議の定期的開催など、法人運営組織を改革して、学内外の情報を共有化しながら、諸機関や各部署の連携・協働による教育研究を推進できるように体制を強化しました。

一方、平成23年頃より、世界的経済不況に加え、東日本大震災及びそれによる東京電力福島第一発電所の事故等により、国の財政がいっそう逼迫するなかで、毎年1兆円以上もの国費により賄われている国立大学の存在意義が厳しく問われていることに対し、国立大学協会は、「国立大学の機能強化—国民への約束—」（平成23年6月）、「国立大学の機能強化—国立大学の自主的・自律的な機能強化を目指して—」（平成25年5月）を纏め、その基本方針に基づきながら、各大学における改革を進めてきています。同時に、文部科学省は、中央教育審議会答申（平成24年8月）やその後の協力者会議、また、政権交代後の自由民主党の教育再生実行本部や教育再生実行会議等の提言を受け、「今後の国立大学の機能強化に向けての考え方」（平成25年6月）を示し、「大学改革実行プラン」に従い、ミッションの再定義を進めています。

京都教育大学は、高度専門職として優れた資質・能力を持つ、特に様々な教育課題に対応できる実践的能力を有する教員の養成と、生涯学び続ける教員の研鑽を支援することに重点を置き、本学の特色を出していきたいと考えています。そこで、本学のミッションにおいて（現在、文部科学省とのやりとりの最終段階）、「強みや特色、社会的役割」として、以下のように提示しています。

「京都教育大学は、教育委員会などとの連携・協働を強め、学士課程や教育学研究科及び連合教職実践研究科のさらなる改革による実践型教員養成への質的転換とその充実を図ると共に、地域に密接して、とりわけ義務教育に関する教員養成機能の中心的役割を担いつつ、他府県から集まりやすく、また歴史や伝統文化

を持つ大学のまち・京都の特性を活かして、近畿を中心にした広範な地域の教員養成の一翼を担っていく。」

この教員養成分野におけるミッションでは、大学教員のうち小・中・高校等の学校の専任教諭経験者について、また、学士課程や教育学研究科及び教職実践研究科の卒業・修了生のうち教員就職者について、現状と第Ⅲ期目標期間末までの数値（目標）を明示することになっております。

本学は、文部科学省の分類（A型広域拠点型、B地域密接型、C型大学院《現職教員再教育》重点化を目指す）のB型になっており、実状からすると、大変厳しい状況です。京都出身が約3分の1、京都以外の近畿から約3分の1、残りがそれ以外のほぼ全国からで、卒業後の教員就職も人は入れ替わってもほぼ同じ比率です。特にB型が記載すべき、京都地域の小学校教員採用（正規）の中、本学の占有率は、府内の他大学よりは多いのですが、極めて少なく、文部科学省との交渉で、B型が記載する教員就職率（講師を含む）の併記も認めていただきました。これから、いくつかの数値目標を達成させるためには、様々な改革を早急に進めていかなければなりません。

京都地域への小学校教員の就職率を上げるためには、入試改革が必要ですし、在学中に、学校教員の職務の厳しさを知ってなお臆さず、教員として必要な力を伸ばしていくような学生たちへの指導のあり方や、京都の特性を活かしてアイデンティティーをふまえて国際的視野を持つ教員養成をするためのカリキュラムの工夫など、すべきことが多々あります。平成26年4月設置予定の6年制教員養成高度化コースは、教員への意欲を高めながら、特に実践的指導力を強化するために、附属学校や教育委員会の協力による公立学校等を活用し、各自の教育課題を探究しつつ段階ごとに論文に纏めながら、さらに実践とともに考究しつづけられる教員になれるように、模索をしたいと思います。また、京阪奈三教育大学の連携推進事業の一環である「教員養成高度化拠点」として、本学独自に設置した（平成25年10月1日）「教職キャリア高度化センター」は、教育委員会や公立学校等との協働により、教員の初任期から教職を積む過程全体の支援に関する研究開発を行い、実施するとともに、その方法と成果を三大

学で共有しながら、さらに広げていく予定です。本学の卒業生・修了生のみではなく、京都地域の現職教員を対象にしています。これも、京都における教育の総合大学として、本学の社会的役割と考えます。

最も本質的な重要な課題は、学生の自発的な思考や議論を促し、能動的な学びに繋げていくために、どのような指導や対応をすればよいかということです。特に教員志望への意欲を高め、協働的取組や自律的研鑽ができる学生や院生にしていくためのいろいろの試みが必要だと考えています。

これから、本学が解決すべき課題は、財政的基盤を

確立することも含め、多くありますが、「未来を拓く教育」に携わっていることを気概に、少しでも本学が発展できるよう務めてまいります。先日報道された、パキスタン生まれのマララ・ユスフザイさん（16歳）のスピーチ（アメリカの国連本部）での訴え「総ての子どもに教育を受ける権利の実現を」における「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン、それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です。教育を第一に。」との言葉に心を強く打たれました。

新図書館、建つ 附属図書館の歴史と増改修

附属図書館長 太田 耕人 (文責)



新図書館が、正式に開館しました

建物が3月末にできあがり、4月に仮開館すると、「明るくきれいになった」と、お褒めのことばをいただきました。しかし、館内は完成には程遠い状態でした。新しい書庫には書架も入っておらず、予定していた机、イスの買いかえもできていませんでした。あれから6ヶ月、ようやく図書館本来の働きができるようになりました。

思えば半世紀前、先人たちは附属図書館を、大学の「まんなか」に建てました。図書館こそ、教育と研究の中枢をなす、という思いがあったからです。

しかし時が経つにつれ、建物はどうしても古びてゆきました。それでも古い革嚢に新しい酒を入れようと、図書館はつねに時代に即したサービスを提供してきました。図書検索システムの電子化、電子リソースの導入、紀要等のリポジトリ化。また、地域住民への開放、夜9時までの開館の延長もおこないました。小さな大学の小さな図書館にとって、相当な努力と工夫の要ることでした。

幸いなことに、この小さな図書館は愛されました。2009年(平成21年)度の卒業時のアンケートでは、4回生の73%が「図書館に満足」と回答してくれました。夏暑く、冬寒く、錆びた水道管から茶色い水が出る、そんな図書館を愛してくれたのです。

学生の好意的な反応は、ほんとうにありがたいものでした。しかし、さすがに変わらぬ床面積では、増えるばかりの蔵書を収めることはできません。学習スペースをIT化するにも、限界がありました。かくして、図書館は増改修されることになりました。

この特集では、新しい図書館の成り立ちをご紹介します

ますが、それに先だち、私たちの図書館の歩みを少しふりかえてみたいと思います。

これまでの附属図書館

●附属図書館事始め

附属図書館の歴史は、1949年(昭和24年)5月、京都学芸大学が設置された時点にさかのぼります。北区小山の旧師範学校の敷地に附属図書館(木造平屋建546m²)、桃山分校に分館(木造2階建356m²)が置かれました。それまで「図書室」はありましたが、「図書館」はありませんでした。

当時の蔵書は3万冊余り、設備もごく貧弱でした。国費による図書購入費は年に30万円余りしかありませんでしたが、設備の改善と蔵書の充足に力を注ぎ、父兄会や紫光会(同窓会)等の援助もあって、昭和30年末には5万冊をこえました。

1957年(昭和32年)9月、附属図書館も大学とともに現在の藤森キャンパスに移転します。当初は、改修した旧兵舎の2階に置かれ、延べ816m²しかない仮設的な施設にすぎませんでした(一般閲覧室327m²、参考図書閲覧室30m²、新聞閲覧室23m²、書庫223m²、事務・管理室126m²、その他83m²)。

大学は教育・研究に果たす図書館の役割を重視し、図書館の新営を要求し続けました。ようやく1964年(昭和39年)、開学15周年を機に念願がかない、翌1965年(昭和40年)3月、鉄筋コンクリート2階建ての建物(書庫は4層)が姿をあらわしました。開架閲覧室(315m²)、視聴覚室(95m²)、文献複写室(55m²)、書庫(452m²・8万冊収蔵)、新聞閲覧室(78m²)、管理室(563m²)等を備えた、延べ1,554m²の近代的図書館の誕生です。

その後、蔵書と利用頻度が増えるにともない、1977年(昭和52年)9月、旧館を模様替えるとともに増築をおこない、閲覧室、書庫を倍近くに拡大しました(閲覧室509m²、書庫867m²・15万冊収蔵)。ちなみに今回増改修された図書館にも、南館の開架閲覧室へと上るモダンな階段、元本学教授・桑田道夫画伯のモチーフで仕上げられた吹抜けの壁面など、旧図書館の面影が残されています。

●老朽化とたたかう

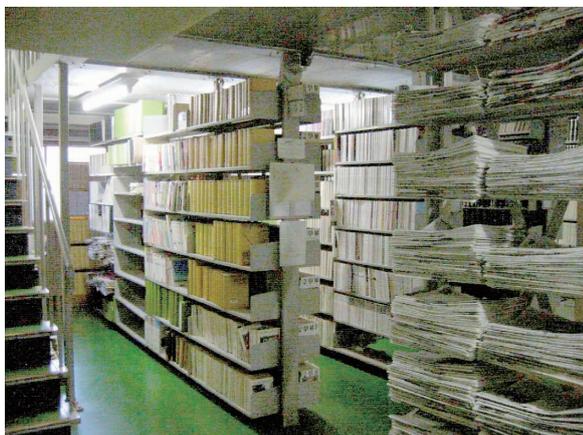
35年ぶりとなる今回の工事まで全面的な改修ができず、建物は老朽化しましたが、サービスは時代に即

し、着々と更新されていきました。

1989年に図書検索システムを導入して以来、蔵書の登録を進め、2000年までに検索用図書カードを廃棄し、代わりに検索用コンピューターを設置しました。また、システムの更新で空いた館内のサーバー室（建築当初は事務室）をグループ学習室に改装し、学生が利用できるよう、情報処理センターの端末も導入しました。今回できたラーニング・commonsの原型ともいうべき部屋でした。

グループ学習室は年々利用者が増えましたが、閲覧席の使用率は低下していきました。従来の仕切りのない閲覧席では、個人席をもとめる学生の希望に、明らかに応えられなくなっていました。

利用者の推移を統計でみると、1998年（平成10年）度の入館者数は103,000人、貸出冊数は学生16,405冊（1人当たり7.53冊）。まだ冷房が入るのは一部の教室のみで、学生が図書館へ涼をもとめてやってくる時代でした。改修直前の2011年（平成23年）度入館者数は64,700人、貸出冊数は学生19,637冊（1人当たり10.4冊）と、貸出冊数は微増しましたが、入館者数は大きく減りました。なにしろ冷房が入る教室は当たり前、携帯電話で図書目録もデータベースも検索でき、日本語の文献も一部はオンラインで読める時代です。「図書館に来なくてはできないこと」は、確実に変化していきました。



増改修前の旧図書館・書庫

本学の蔵書冊数は約35万冊。開架閲覧室には、約10万冊の資料を収めた書架と閲覧席がすきまなく並び、利用頻度の低い図書を書庫に移したくても、書庫は既に満杯でした。学科や研究室から資料を図書館に移すこともできませんでした。空きスペースへの書架の増設をおこなう一方、ここ10年で、延べ1万冊近くの図書や雑誌などを廃棄して、増加しつづける資料等にどうにか対応してきました。

建物の老朽化が進み、大雨のたびに雨漏りし、ゆが

んだ建具からすきま風が入り、故障のため一部では冷暖房が使えないなど、設備面の問題も増えていきました。電子ジャーナルの導入、機関リポジトリによる大学紀要のオンライン化、学生向けのデータベース講習会など、進行する電子化に対応するためにも、改修の必要性は大きくなっていきました。

増改修はじまる

●改修計画を練る

手狭になりはじめた1990年頃から、すでに新館建築の構想はありましたが、実現の見通しはまったく立ちませんでした。2000年頃からは増改修に方向を転じて、予算要求を重ねました。そんななか、図書館長を務められたことのある寺田光世学長（当時）が、思い切った布石を打ってくださいました。大学の自己資金（第一期中期計画の積立金）による、新棟（現・学生課）の建設です。将来その2～4階に図書館（現・西館）を増築することを想定して、設計・工事がなされました。

2年経った2011年（平成23年）、研究棟の耐震改修があり、返却された図書の処置に追われていたときのことでした。うれしい報せが飛びこんできました。補正予算で増改修が認められたのです。

新しい建物が完成すれば、図書館は上から見て口の字型になります。その“四辺”を東館・西館・南館・北館と呼ぶこととし、従来から玄関がある北館には企画展示室とラーニング・commons、南館には児童書コーナーや開架閲覧室を置くことにしました。西館2階も開架閲覧室にして、南館とあわせて主たる学習・研究用資料を収めます。西館3・4階には電動集密書架（後述）を設置し、利用者が自由に出入りできる書庫にします。東館は今までどおり、閉架書庫にすることにしました。

完成すれば、延べ床面積は4483m²（167%増）となり、懸案だった書架の増設が可能となります。レール上を移動する電動集密書架の導入で、効率よく図書を収蔵でき、開架率も56%から77%に上がります。バリアフリー化はもちろん、ラーニング・commons、グループ学習や個人学習のためのスペースを設け、多様な学習ニーズに応えることができます。展示室や研修セミナー室などを設けて、地域社会との連携も深められます。将来への展望がひらけ、希望がふくらみました。

●引越しに追われる

増改修が決まってすぐ、当時改修中だった奈良教育大学附属図書館に見学に行きました。引越は付随的なものと甘く考えていたのですが、実際の話聞いて、

大変な事業だと気づかされました。

まず、会計課で引越の予算をつけてもらうため、統計・シミュレーションをおこない、業者から見積りをとりました。全館の蔵書や机、イス、書架を一度運び出し、また元に戻すのですから、とんでもない金額になります。引越業務を発注するには、対象となるすべての資料、書架、机等の場所、数、行き先を指示しなければなりません。発注規模によっては入札になるので、日程的な余裕も必要です。

毎日、職員は図書を保管するダンボール箱のサイズを考え、メジャーを持って館内の物品を測りました。学内各所をお願いをして確保した保管場所にも足を運び、物がちゃんと収まるかどうか計測しました。



立錐の余地もなく講堂に積まれた段ボール箱

最大の保管場所だった講堂については、建物平面図をもとに、ダンボール箱の底面積と耐荷重から収載可能箱数を算出しました。物品や書架には種類別に通番をつけてシールを貼りました。図書は書棚ごとに番号をふり、保管するダンボール箱にその番号シールを貼りました。書架は移動のたびに分解・組み立ての必要があり、しかも移転後は配置も構成もまったく違うところへの搬入となります。右から左への移動とはいきません。

その場所をどう使い、どんな資料を置くか相談しながら、書架や物品の配置を決めてゆきました。時間をかけたいのに、かけなくてはいけないのに、時間が無い！というジレンマが常につきまといました。

●工事のスタート

いざ工事というときになって、ありがちなこととは言え、諸般の理由で施工が1ヶ月遅れました。当初の計画では、まず西館を完成させて、そこに事務室や開架図書を移して、既存の北館・南館の工事にかかる予定でした。しかし最終的な竣工予定をまもるため、居ながらにして工事という事態に陥りました。利用スペースがほぼ半減し、壁一枚隔てたところが工事現場



事務室（1階）の上が工事現場

となりました。トイレもなく、寒い・うるさい・埃っぽい・狭い・不便と五重苦の1ヶ月を過ごしました。

西館が竣工すると、開架の図書を西館2階に移して12月から3月まで仮開館しました。一方、10月～2月は事務局棟の大会議室に視聴覚資料・IPC端末を置き、分室としました。書庫の図書約13万点は約1年間使用できませんでしたが、最も規模を縮小した時でも約10万点の資料を提供し、大学図書館としての最低限の義務は果たせたのではないかと考えています。

新図書館をご案内します

かくて2012年（平成24年）10月末、学生課の上に2階から4階までを積み上げる工事が終わり、西館が竣工しました。2013年（平成25年）3月末には、既存の北館、南館、東館（旧書庫）の改修も完成しました。西館の道路に面した側には、細長い黒い板がずらりと取り付けられていて、人目を引きました。あれは何か？と、たびたび訊かれました。

●新図書館はエコ設計

じつは新図書館は、さまざまな点で地球環境に配慮した設計になっています。西館側面についている黒い板は、計132枚の太陽光パネルです。太陽光発電により1年間で得られる期待発電量は6,842KWh。天



然資源の保護効果では、原油使用量1,664.5L（灯油缶92.5個分）に当たり、二酸化炭素排出抑制効果は2.587 t-CO₂（森林面積に換算すると26,556m²）になります。屋上に敷きつめた太陽光パネルの分もふくめて、全体の発電状況は、北館玄関に設置してある液晶テレビでご覧になれます。

また、館内の照明はLEDライト、HF蛍光灯を採用し、電力使用量をさらに抑えるため照度も落としています。その分、閲覧机にはデスクライトを設置し、やはりLEDライトを採用して、省エネを図っています。エアカーテンを随所に配して、冷氣や暖気を逃がさない工夫もされています。

●中庭とリフレッシュラウンジ

新図書館には入り口が二つあります。大学生協に近い従来の玄関のほかに、学生課のほうからも入れるようになりました。学生課のほうから図書館へ来ていただくと、入館ゲートの手前に、「リフレッシュラウンジ」が設けられています。ベンチやちょっと変わった形のテーブルが置かれ、各種の美術館等のチラシやポスターなどを眺めながら休憩できるスペースです。テーブルは、組み合わせれば1つの広いテーブルにもなります。掲示板の1面はホワイトボードになっていて、メッセージを書くことも可能です。近々、自動販売機も設置する予定です。調べ物や読書に倦んだら、飲み物で喉を潤してください。

入館ゲートを入れて右手、北館と南館をつなぐ渡り廊下の西側には、ソファが置いてあります。このソファもリフレッシュラウンジの一部。フタのある飲料なら飲んでもOKです。

図書館には大小2つの中庭があります。大きな中庭には、入館ゲート前のガラス戸から出ることができません。ケヤキとシマトネリコの葉が風にそよぎ、ウッドデッキにベンチがあります。5～6月ならシマトネリコの花、11月頃ならケヤキの紅葉を眺めながら、のんびりと昼食を取ってはいかががでしょうか？



小さい中庭には出ることができませんが、ナツツバキが2本、6～7月に白い花を咲かせます。彫塑も1つ鎮座しています。本学の名誉教授、番匠宇司（ばんしょう・たかし）氏の作品「円の戯れ」（1964年）です。興味のある方は、西館3階集密書架にある『番匠宇司作品集』（「円の戯れ」はp.38に掲載）をご覧くださいと思います。

●電動集密書架

いま話に出た西館3階、そして4階に上がってみましょう。西館の北角の階段は、外壁がガラス張りになっていて、彼方の山々が見晴らせます。ぜひ4階まで上って、大学のなかで最も高い場所からの眺めを楽しんでください。

西館3・4階には、ボタンを押すと電動で移動する集密書架が設置されています。各階には1階あたり計100列の棚が並び、1列は6連（1連は幅90cm）で、6段もしくは7段から成っています。1段あたり30冊入るとすると、23万4千冊も配架できる計算です（もっとも2012年度時点で図書館が管理している資料は、前述のとおり約35万冊にもものぼるのですが…）。書架に挟まれないように安全対策も施され、耐震構造もばっちり。安心して、どんどん活用してください。



●多様な学習スペース

新図書館には、用途や希望に応じた、さまざまな閲覧席を用意しました。仲間と話しあいながら勉強できるラーニング・コモンズ（後述）にたいし、ひとりでじっくり集中できる、1人用の鍵つき研究個室を3室、西館3階に用意しました。また、開架閲覧室の4人用と6人用の閲覧机は、アクリルパネルで隣の席と仕切られ、使いやすくと好評です。壁ぎわには1人用のキャレルデスクを、資料にも近く学習しやすい場所に並べました。また、無線LANの使える場所を増設し、多様なニーズに対応していきます。



●ラーニング・コモンズとは何？

さて、北館2階にはラーニング・コモンズ（写真上）ができました。「ラーニング・コモンズ」って、何のことでしょう？文字どおりにいえば「学びのための共有地」。「コモンズ」は市町村の中心にある共有地、行事などで住民が集まる場所です（むろんここでは喩えとして使われています）。科学技術・学術審議会は、「ラーニング・コモンズ」をこう定義しています。

「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする『場』を提供するもの。その際、コンピューター設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを支援する図書館職員によるサービスも提供する」。

ちなみにエール大学図書館のスコット・ベネットは、コモンズということばの背景に、大学における学生や教員の「談話室（コモン・ルーム）」の伝統をみています。本学でいえば学生控室や教員の共同研究室にあたる部屋です。昼休みなどに、控室で授業の課題やレポートのことを話して、ヒントを得たおぼえはだれにもあることでしょう。

問題に気づき、印刷物だけでなく映像、電子情報も横断して情報を集める。仲間と話し、頭を整理して、よく考える。こうしたプロセスのなかで、情報は知識へ、知識は知見へ、創造的に変わっていきます。

ラーニング・コモンズでは、館内で入手した文献を参照しつつ、インターネットで検索できます。パソコンで資料を作成・印刷し、パワーポイントを映し、仲間と議論することもできます。パソコンや周辺機器のほか、移動可能な机、メモ台付きのイス、ホワイトボード、電子黒板などのほか、リラックスして物を考えられるように、ソファも置きました。

●「教わる」から「学ぶ」へ

「インフォメーション・コモンズ」とよばれる施設が、南カリフォルニア大学にできたのが1994年。

それをお手本に、端末の並ぶスペースが、またたく間に世界中の図書館につくられました。「情報が書物に取って代わる（replacing books with bytes）」革命がおきたと思われました。マイクロソフト・オフィスや統計ソフトが使い、電子リソースにアクセスできることが、当時は画期的でした。

ところが今では、自宅やモバイルで、ほぼ同じことができてしまいます。電子情報への移行はインフォメーション・コモンズがなくても、いずれおこったはずです。むしろ革命とよぶべきは、大学教育がこれを機に、教室で「教える」ことから、学生が自主的・能動的に「学ぶ」環境を整えることへ、大きく舵を切ったことでした。

授業は教員と学生という力関係（ヒエラルキー）のなかで、堅苦しい一方的な情報伝達になりがちです。仲間との協働学修（peer learning）や能動的学修（active learning）では、くつろいだ双方向の意志疎通のなか、自由な発想が生まれ、情報が知識として活かされます。端末を置いただけの「インフォメーション・コモンズ」は、かくて「ラーニング・コモンズ」へ進化することになりました。

一口に「ラーニング・コモンズ」といっても、たとえば理工系大学と本学とでは、必要とするものが大きく異なります。今回の増改修では、模擬授業など本学学生のニーズを想定して、ラーニング・コモンズをカスタマイズしたつもりです。将来、教員をめざす学生にとって、主体的に学ぶ力はなくてはならない資質です。大学で学んだことの半分が十年後には、誤りや不適切になる時代です。学問や社会の変化についていくため、主体的に学び続ける習慣を、ぜひ身につけてほしいと思います。

●企画展示室

北館1階の企画展示室では、教科書展（平成8年より毎年実施）などの図書館主催の展示や、本学の学科や教員による展示をおこなっています。すでに、4月



には第17回教科書展（中等教育・技術科）、5月と6月には本学名誉教授で元・附属図書館長の土倉亮一氏による写真展「小さな花と実」、10月には美術科・発達障害学科・まなびの森ミュージアム主催の美術作品展「一麦寮 色とかたち展 -素材がうたう-」（写真）が開催されました。

西館1階のオープンスペースもふくめれば、広さは約206m²。天井にはピクチャーレールやライティングダクトがあり、展示に応じたレイアウトにすることができます。

企画展示室での展示は、本学の学生や教員のみならず、広く地域の方々に開かれています。大学図書館が大学の構成員だけを対象にしていたのは、今やむかし話。地域コミュニティーのなかで、ふさわしい役割を担うことが求められています。

●子どもと本が出会える場所へ

その一環として、陽ざしの明るい南館1階に、広くゆったりと、児童書コーナーをつくりました。やってくるのは、もちろん地域の子どもたち。やがて教師として子どもと向きあうであろう学生諸君に、児童書に興味をもってもらう場でもあります。

新聞や雑誌が置いてあるブラウジングコーナーを抜けると、大きな絵本の表紙が目に入ってきます。まるで児童書コーナーの看板のように、ここが楽しい場所であることを子どもたちに教えています。よく知られた絵本を読み聞かせ用に大きくした大型絵本、いわゆるビッグブックです。うさぎ型のいす、にんじん型のテーブルを並べ、畳を敷いた読み聞かせコーナーも作りました。くつを脱いで畳に上がり、子どもといっしょに絵本を読んだり、小規模の読み聞かせをしたりする空間として、児童書コーナーの核となる部分です。

教員養成系大学ですから、以前から絵本や児童文学も大切にしてきました。しかし、増改修前は北館と南館をつなぐ渡り廊下に児童書が置いてあり、落ちついて読める環境ではありませんでした。子どもと読書のかかわりを考え、実践をおこなう場所として、また地域に開放して、子どもと大人と一緒に児童書に触れられる場所として、発展への一歩を踏み出しました。

図書館は従来から、幼児教育科の研究室との共催で「うたとおはなしの会」を開催しています。平成25年4月には第20回を迎えました。保護者をふくめて参加者が100名を超える回もある人気企画です。今年

の10月からは、畳を敷いたコーナーを使って、幼児教育専攻の学生が企画・運営する、読み聞かせの会がはじまります。

児童書を置くのにふさわしい書架の整備も、もちろん進めています。西側の壁ぎわに、子どもが選びやすいよう、低めの絵本用書架を設置しました。絵本との思わぬ出会いがあるよう、最上段は表紙を見せて、本を立てることができるつくりになっています。約1,200冊の絵本が納められます。

絵本の棚をご覧いただければ分かりますが、『ぐりとぐら』シリーズなど昔からのベストセラーはもちろん、子どもたちに人気の『ちか100かいだてのいえ』など比較的新しいものも増やしています。大学図書館ですから、原書の絵本も揃えています。なかでも19世紀英国の名作絵本を中心にした「復刻世界の絵本館（オズボーン・コレクション）」（ほるぷ出版、1979年）は、絵本の歴史を知る上で、またとないシリーズです。

また、2010年には児童文学・児童文化の研究者である斎藤壽始子氏から寄贈された資料を整理し、「斎藤文庫」を設けたことも本学の大きな特色です。研究書に加え、絵本約1,400冊、児童文学約600冊をふくむこの貴重なコレクションは、子どもの読書への理解をより一層深めてくれることでしょう。

参考文献

- ・京都教育大学開学30周年記念誌編集委員会編『京都教育大学開学三十周年記念誌』（京都教育大学、1980年）
- ・京都教育大学一二〇周年記念史編集委員会編『京都教育大学百二十年史』（京都教育大学、2001年）
- ・Mary M. Somerville and Sallie Harlan, "From Information Commons to Learning Commons and Learning Spaces: an evolutionary context", in Barbara Schader ed., *Learning Commons: evolution and collaborative essentials* (Oxford: Chandos, 2008) .
- ・科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について」（文部科学省、2013年8月）

執筆（執筆順）

榎本幸水、山本綾乃、米谷昌代、金森悠一、太田耕人、角野容子

イタリアの自由な気質

数学科准教授 深尾 武史

まもなく空港からミラノ中央駅に到着となり、ホームには落書きでペイントされてしまった電車の車両が見えてきました。ミラノ中央駅は私が留学していたころと比べるとずいぶん新しくなり、チケット売り場やお土産屋さんの数々がきれいになっていました。目的地のパヴィアはミラノ中央駅から電車で30分ほどの近距離にあります。電車のチケット購入には自動券売機が使えるので便利なのですが、行き先までの値段を押すだけという日本のそれとは異なり、座席指定はもちろん様々な機能を兼ね備えているおかげで皆が購入に時間をかけてしまいがちです。挙げ句の果てにクレジットカード専用機だったということもよくあり、自動券売機にも結局行列ができてしまいます。そんなイタリアらしいお茶目さを思い出しながら7月1日の夜、私はパヴィアに2週間の滞在のためやってきました。



ミラノ中央駅

パヴィアはイタリア北部の歴史ある街で、街の中心にはシンボルの教会（ドゥオモ）やヴィットリア広場があり、南にはティチーノ川が流れ、屋根付きのコペルト橋が架かっています。まさに街のど真ん中にパヴィア大学のキャンパスもあるのですが、そこは文系のキャンパスで、数学科のある理系キャンパスは街の郊外にあります。以前は広大な畑だった所に新しく大学の宿泊施設や学食が建設されていました。大学関係者用のプールやジム、保育施設など充実した環境が印象的です。私はその宿泊施設に滞在させてもらうことになりました。



ヴィットリア広場と教会



コペルト橋

今回の滞在では日本とイタリア間の二国間交流事業の支援を受け、私の最近の研究成果を発表すること、共同研究に向けて議論を行うことが主な目的で、滞在期間中の朝から晩まで数学漬けの環境を頂くことができました。おかげでこれまでの抽象理論を応用した新しい研究を共同研究として進めていく計画を立てることができました。



パヴィア大学応用数学セミナーにて

私がお世話になったコリー教授の師匠であるマジエネス教授（1923-2010）は世界的に有名な数学者の一人です。有名人の名前の付いた通りはヨーロッパ

ではよく見かけますが、数学科のキャンパスに続く新しい通りに先生の名前が付けられており驚きました。



マジェネス通り（右奥の建物全てが数学科）



通りの看板

「おまえがいいならばそれでいいんだ。」と留学中にしていたある議論の中で言われたことがありました。方法論についてその自由な発想と思い切りの良さに私は感銘を受けました。何か正解の方法があり、それに従わねばならず、その方法から外れることは間違いであるという狭い考えから私は解放されました。「方法は自分で決めれば良いものだ。模倣をしたければそうすれば良いし、新しいチャレンジがしたければそうすれば良い。ものを作るというのはそういうことだ。」私の現在の研究の哲学は留学時のこの経験から来ています。

滞在期間中、留学中のことを思い出し、仕事が終わるとよく街の中心地へ出かけました。留学中の最初の1ヶ月間、私は街の中心にある学生寮にお世話になりました。古くは修道院のような施設だったその学生寮は、朝夜の食事付きで多くの学生や留学生在していました。イタリアの学生寮の仕組みは、講義のある期間中は部屋を借りていられるが、長期休暇になるた

びに一度部屋を空っぽにして返さねばならないというものでした。長期休暇中は大学で様々な研究集会が開催され、参加者のために学生寮が宿泊施設になるからです。学生寮の食事の時間は各自自由ですが、大きな長テーブルに皆が座れるようになっていました。留学してすぐ、そのような環境でイタリアの家庭料理を楽しむことができたのもいい経験でした。学生寮のイメージはまさに映画「ハリーポッター」に出てくる寮のような感じです。



当時滞在していた学生寮

ウィキペディアには上の写真の建物が大学として紹介されており、確かに見間違えるほど歴史ある立派な建物ですが、これは学生寮です。



パヴィア大学 文系キャンパス内

スローライフという表現が適切かどうかは分かりませんが、イタリアの生活では時の流れが日本と異なるように錯覚します。日本と比べてどちらが良いということではありませんが、卒業旅行でもどんな旅行でも良いのでイタリアの生活を経験できる機会があれば是非一度と、学生にはいつもお勧めしています。

2012年10月3日に京都に来日した時、最初に思ったことは「本当に来ちゃった！」でした。エジプト出身の私ですが、中学校と高校ともに日本の学校を卒業しました。一般のエジプト人なら京都は日本の有名な都市のひとつで忍者や侍がいるかもしれないという印象を持っている人がいますが、まさか修学旅行でしか知らない京都に住むことになるうとは夢にも思いませんでした。それに初めて家族の元を離れ、エジプトからかなり遠い京都まで来たことにはあまり現実味がありませんでした。しかし、今日からどんな生活が待っているのかとても楽しみにしていました。

京都に来てからすぐにしたことは住所の登録や授業登録の手続きでしたが、その直後にしたことはあっちこっちで行われていたお祭りとウエルカムパーティーに参加することでした。平安神宮でやっていた学生祭典や中書島駅付近でやっていた松明のお祭りを見に行った時、日本にいることを実感しました。また、国際交流会館や向島学生センターでやっていたウエルカムパーティーに参加することで友だちができ、京都になじむことができました。

大学に通い始めると、エジプトの大学との違いをたくさん見つけました。例えば、私が通うアインシャムス大学ではサークルや同好会がありませんでした。それぞれの学期にスポーツ大会がありましたが、それは興味ある学生が個人的に申し込むものであり、サークルで鍛えて、皆で申し込むものではありませんでしたので、仮にスポーツ大会のバスケの試合に出ようと思って、申し込んだら、まったく知らない学生といきなりチームを組み、他の学科の学生たちと戦うことになります。(友だちと申し込みに行けば、話は別ですが)それはそれで面白くて、楽しいですが、1学期に1回よりもサークルのように定期的に自分の大学の学生と知り合い、仲良くなる機会があったほうが、楽しさが持続しそうです。しかし、エジプトではサークルのような活動はスポーツクラブや大学の外のいろいろな機関でやるものだという考えがあるので、大学内にサークルができるのは難しいでしょう。

大学の勉強以外にもせっかく京都に来たので、何らかの活動がしたくなりました。そこで、私が知った活動は二つありました。一つ目はサラダボウルプロジェクト@伏見です。もう一つは京都市国際交流協会のPICNIKプログラムです。

サラダボウルは伏見区役所の青少年活動センター付属の団体で、目的は国際交流や多文化共生です。私がサラダボウルに参加した理由は京都に来てから、留学生と行動することが多く、授業を担当する先生以外にあまり日本人と関わる機会がなかったからです。サラダボウルに入団することで、日本にいることを実感し、日本人の友達を増やし、また京都在住の他の留学生と知り合うことで、留学生活が楽しくなるだけでなく、視野も広げられると考えたからです。普段のミーティングだけではなく、宿泊プログラムやサラダボウルフェスタなどのイベントのどれも楽しく、エジプトに帰国後も、そのようなイベントや活動をしてみたいです。

PICNIKプログラムのPICNIKは Program for Inter Cultural Nexus in Kyotoの略称です。具体的な活動内容は京都の様々な小学校や中学校に行って、自国の文化を紹介することです。その活動をするにあたって、自分がどれくらいエジプトのことを知っていて、何が当たり前前の日常生活になっていて、気づかなかったのかを知りました。それに日本の小学生のエジプトに関する質問はとても面白かったです。お年玉をいくもらうのかということまで、様々な質問をされました。

たった1年間の留学生活でしたが、濃い1年間でした。京から学んだことや体験したことを生かして、エジプト帰国後も積極的にいろいろなイベントに参加して、京都でエジプトの紹介をしていたように、今度はエジプトの皆に京都の素晴らしさを知ってほしいです。



お疲れ様パーティー



成人式



サラダボウル宿泊プログラム

家族を超えて紡ぎ合うネットワークの構築

家政科教授（家庭経営学・家族関係学） 杉井潤子

50年先の生き方を考える

ネイティブアメリカンの口伝に、「あなたが生まれたとき、あなたは泣いていて周りの人々は笑っていたでしょう。だから、あなたが死ぬときは、あなたは笑い周りの人々は泣いているような人生を送りなさい」という言葉があるという。わたしたちは、今後、生老病死を紡ぐ人生を誰とどこでどのように送るのであるか。

現在18歳の若者が65歳となる2060年には、我が国の総人口は現在の約3分の2に減少する。さらに人口高齢化はますます進み、約40%になる。周りに目を向ければ高齢者ばかりの、まさに圧縮された超高齢大衆長寿社会である。家庭生活に目を向けると、2030年には一人暮らしが全世帯の4割近くになると推測されている。果たして人生の最期に、自らは笑い、周りに涙してくれる人々はあるのだろうか。いるとすれば、そのなかに「家族」はあるのだろうか。親は？子どもは？配偶者は？… 家族とケア（子育て／介護）を通して、50年先の生き方を考えてみたい。

個人—家族—地域社会の変化

「家族」や「家庭」とは明治20年代以降に普及し、それぞれFamily、Homeを翻訳してつくられた概念である。今ではごくあたりまえに使われ、共通理解があるかのように考えられているが、実は約130年の歴史しかない。前近代社会から近代社会、現代社会、さらに近未来における「家族」のとらえ方を地域社会・親族組織、家族集団、個人の比重の変化を通してイラストでわかりやすく示したものが下図である。

前近代社会では、地域社会や親族組織の連帯が強固であり、個人さらに家族集団という意識よりも、「ムラやイエのため」という価値規範が第一義であり、いわば村落共同体のなかで近隣とともに暮らす家族生活

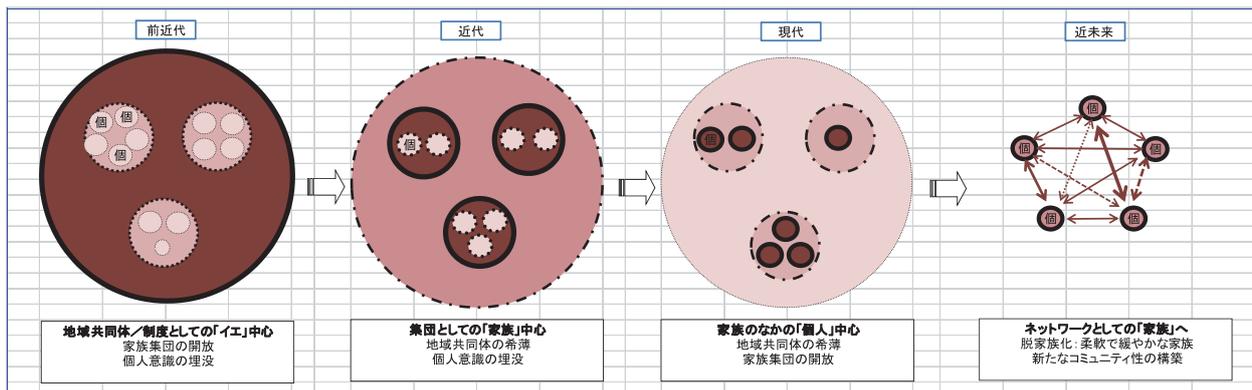
が営まれていたといえる。近代になって私的領域としての家庭を軸に、家族と家族外を区別する境界が明確になることにより家族の集団性が強化され、「家族のため」という価値規範に移行した。高度経済成長時代の核家族であり、家族みんなのために一家団欒の生活が営まれていたといえる。

1980年代以降現代にいたると、家族の個人化現象が指摘され、生き方やライフスタイルに関して個人の選択や選好が優先されるようになった。「家族ひとりひとりのため」という個人本位の価値規範が重視され、「家族であっても、わたしはわたし」という家族生活が営まれるようになってきている。家族規範の変容にともない、家族規模も縮小するなかで、家族の相対的位置づけは低下し、「一緒にいるから家族」「血のつながりがあるから家族」ではなく、家族は個人が日々育み努力して維持する関係性へ、と変化している。

今後もますますこの現象は強まり、近未来では家族であるという境界も限りなく薄くなり、個人がどのように暮らすのか、言い換えれば誰とどのようにつながって暮らしていくのが問われるようになってくると推測される。まさにひとりひとりが営む「ネットワークとしての家族」である。「家族」という言葉は変わらないものの、わたしたちの暮らしや生き方にかかわる家族生活の内実は大きく変容してきているのである。

家族の個人化がもたらした功罪：家族を選ぶ／選ばない／選ばない

「家族」が個人化した過程で見落としてならないのは、個人の意思や尊厳が尊重されることは自分の選択・選好の自由が拡大し保障されると同時に、相手の選択・選好をも尊重しなければならないという両義性



をもつことである。結婚や出産を含め人生のさまざまな岐路に立ったとき、「選ぶ／選ばない」という選択肢は、ときにわたしたちに魅力的な輝きを放つが、それと同時に「選びとった」関係に対する責任と自覚が求められ、さらには「選べる人」と「選ばない人」、さらには「選ばれる人」と「選ばれない人」という厳しい格差をも生み出すこととなったのである。

家族をつくる／つづらない、もつ／もたない、増やす／増やさない、こわす／こわさないという選択・嗜好は、いったい誰が誰のために行うのであろうか。個人化志向が強まるなかで選べるものと選ばないもの双方の権利バランスが大切となってくる。また、家族は幸福なものかどうか、それは個人にとってあるいは家族にとって、見方はそれぞれに異なる。あたたかい家族という、いわば固定的なイメージが先行するなかで、児童虐待、DV、高齢者虐待などさまざまな家族問題を目の当たりにしたとき、それが理想にすぎないことが指摘されている。家族は簡単には変えられない関係性の苦悩をかかえている。わたしたちにとって、家族がいることは喜びであるとともに、ときに呪縛でもある。また選び取った結果であると同時に、選べなかった結果でもある。切れる関係でもあり、切れない関係でもある。さらに世代を超えてつながる関係でもあるだろう。

ケア（子育てと介護）は誰が担うか

「家族」がいるから安心という、根拠のない不思議な感覚がある。子育て支援や介護支援の名のもとで、「ケアの社会化」が企図されている。子育てにせよ介護にせよ、日常生活場面で家族のみに頼れないのはもはや自明の理である。たとえば、わたしたちが期待する「してもらいたい」「してほしい」というニーズを、親子だから夫婦だから、誰よりも理解してくれるのか？という問いに対しても否であろう。ケアを担うときに、「家族だから、できること／してあげられること」がある一方で、「家族だから、むしろできないこと」もある。さらに「家族だから、（虐待などの不適切な対応を）してしまうことがあり」、「家族だから、（虐待などの不適切な対応をされても）我慢して受け入れることがある」と考えられる。愛情と暴力による支配は表裏一体をなし、親密な関係ゆえに「許される暴力／許す暴力」、「逃がさない暴力／逃げない暴力」、「隠す暴力／隠される暴力」が生じるといえる。これらは、おそらくはある特定の家庭でのみ引き起こされる問題ではなく、ある意味で、どこか家庭においても、いつでも引き起こされる可能性があると考えの方が妥当であろう。

エスピン・アンデルセン（Espín - Andersen.G）は「家族であること」の潜在的義務が適度なものに限定されるほうが、むしろ絆はより強められるのではないかと、「脱家族化（defamilialization）」を提唱するが、家族の代替となりうる補完・保障の関係性がない限り、限りなく孤立無縁に陥ってしまう危険と隣り合わせでもある。家族外の公的サービスや民間のサービスの利用や地域での支え合いなど、有効なネットワークを築いていくことが不可欠である。

家族を超えて個人を紡ぎ合うネットワークをつくるために：負の学習の必要性

ここで、ケアにおける子育てと介護を通して、家族を超えるネットワークをつくるための手がかりを考えたい。下図は離乳食と介護食を比較したものである。それぞれに「かまなくてもよい」「舌でつぶせる」「歯ぐきでつぶせる」「歯ぐきでかめる」という段階があり、



素材も同じで、見た目の形状は非常に似ている。しかし、その方向は生老病死において逆転する。子どもは成長とともにだんだん食べられるようになり、高齢者は老化にともなって食べやすいものを食べるようになるのである。

あらためて子どもの成長と高齢者の老化に対する価値づけを考えてみると、わたしたちは近代化を通して、成長とともに「できるようになること」という正の学習を限りなく価値あるものとし、自立することを評価してきた。しかし、その一方で老化とともに「できていたことができなくなることを自ら受け入れることが難しくなり、いわば負の学習を見落とし、人に依存することを忌避してきたのではないだろうか。高齢者介護においても、「できていたことができなくな」っても、「なお、できること」のみに強迫的に固執してきたのではないだろうか。

50年先の生き方を考えたときに、人と人が支え合い、分かち合うには、「できていたことができなくなっていくこと」を学ぶという負の学習に価値を置き換え、「かまなくてもよい」と互いに思い合うことこそが、家族を超えてケアされること、ケアすること、ケアし合うことにつながると考える。

京都教育大学、オンリー・イエスタデイ

社会科学科教授 田岡 文夫

本学では停年が63歳から65歳に延長されましたが、私のそれが近づいてきたこともあってか、赴任当時のことを回想し、本学の歴史的なことに触れながら自由に執筆をとの依頼を頂きました。歴史には大いに興味はありますが、若い方々には、先輩、高齢者の昔話にはさして興味が持てないのではないかと危惧します。私がそうでした。しかしご依頼でもありますので、在籍しました社会科学科経済学専攻と私自身のこと(1.)、その社会科学科自身の変遷で印象的であったこと(2.)、そして本学全体の変遷で痛感することなど(3.)を思いつくままに記してみます。

1. 社会科学科経済学専攻と私自身のこと

本学に赴任する少し前からその後にかけての私自身のことを、まずはじめに述べておきましょう。私は1975年3月に本学第一社会科学科を卒業しました。在学中、経済学を専攻し、指導教員は葛西孝平先生でした。そのほか同じ第一社会科学科の名和献三先生、産業技術学科の岡田賢一先生から経済学の指導を受けました。経済学は範囲の広い学問ですが、葛西先生は経済学説史、名和先生は日本経済論、岡田先生は産業経済論がそれぞれ専門でした。当時の本学では三人の先生から経済学の指導が受けられたのです。岡田先生は産業技術学科の商業の担当でしたが、本来は経済学の専門家でした。三先生の専門が適当に分散していたことは、私にとって非常にありがたいことでした。日本経済や産業経済の現実に関心を持ちつつも、私は理論経済学の体系の緻密さや壮大さ、優美さに惹かれ、マクロ経済学を専門にし、経済成長理論をテーマに卒業論文を作成しました。

本学を卒業後、名古屋市立大学大学院に進学しました。名古屋市立大学は地方の公立大学ですが、当時、



1975年3月18日、卒業式の日、1号館B棟屋上で、名和献三先生(中央)、葛西孝平先生(左)とともに。

活躍が全国的に注目される経済学研究者が非常に多かったのです。指導教員の村田安雄先生、辻正次先生の下で理論経済学、数理経済学を専攻しました。数学の岩橋亮輔先生からも丁寧な指導を永年受けましたが、特筆すべきは春休み、夏休みに他大学それも世界各国から著名な研究者が来られて数日間に渡って開かれるセミナーでした。森嶋通夫先生や浜田宏一先生のごことはとくに印象にも記憶にも残っています。すでに他界されましたが、当時森嶋先生はイギリスLSEの教授で、経済学以外の多くの書物でもその名は広く知られています。浜田先生は当時東大におられ、間もなくアメリカのエール大学に移られましたが、アベノミクスの理論的支柱、内閣官房参与として、高齢ながら今をときめく存在であることは周知のとおりです。その後、私は博士課程前期のあと後期を修了と同時に同大学経済学部助手に採用されました。村田先生、辻先生とともに理論経済学講座に在籍しました。

助手として一年間勤務するうちに、本学第一社会科学科では名和献三先生の停年退官が迫り、光栄にもその後任として赴任しないかとの誘いを頂いたのです。それで翌年1981年4月、専任講師として赴任しました。私の本学勤務はそれ以来ですから、本年ですでに33年になります。第一社会科学科で葛西先生と私、二人で経済学を担当、主に葛西先生が学説史を、私が理論・政策を中心という分担でした。その後、葛西先生は一年間のイギリス留学を経て何年か後、名古屋経済大学に転出されました。葛西先生の留学期間中と転出後の二年ほどは経済学は私一人で担当しました。その後、新たに赴任された水野敬三先生と十年ほど二人で経済学を担当しました。産業組織論が専門の水野先生がミクロ経済学、私がマクロ経済学、そのような分担でした。水野先生が関西学院大学商学部へ転出された後、一、二年私がまた経済学を一人で担当するという時期がありましたが、現在の石川誠先生が来任され、それ以来石川先生が政策的分野、私が理論的分野という分担二人体制が現在まで続いています。

2. 社会科学科の変遷

私が本学に赴任したのは、現在の社会科学科ではなく、第一社会科学科でした。当時、社会科学科は第一と第二に分かれており、第一社会科学科には、哲学、倫理学、社会学、法学、経済学の五専攻、第二社会科

学科には日本史、西洋史、東洋史、地理学の四専攻がありました。前者を「一社」、後者を「二社」と略称していましたが、今ではなつかしい響きです。戦後、京都学芸大学として発足当時は両者は一つに統合されていて、社会科学科が存立していたようですが、その後分立することになったと聞いたことがあります。分れた理由はほとんど話題にされませんでした。後年、どなたか先輩の先生から「感情的な行き違い」がほんとうの理由と聞かされたことがあります。真偽のほどは確かめようがありませんでした。

私の赴任後、一、二社統合のことは何度も議論になりました。当の一、二社自身よりも他学科の方が積極的でした。全学的な催促によって、一、二社内で始められた統合に向けての会議は毎回長時間に及ぶ結論の全く見えないものでした。しかしこれをいやおうなく進めざるを得なくしたのは大学院修士課程の創設だったように思います。大学院社会科教育専修はそもそも一つで、一、二社に分れたままというわけにはゆきません。それに先にあげた一社五専攻、二社四専攻に不思議にも「社会科教育」がなかったのです。大学院社会科教育専修にはこれが必置でした。教員定員枠の増加なしにこれを創設するには、一、二社の統合が不可欠でした。一、二社が統合され、社会科学科が成立、大学院の社会科教育専修も順調に動き始めて、今日振り返ってみれば、分れていた頃のことがむしろ不思議です。

社会科学科の短い歴史の流れ、とくに教育方針で重要なことを私流に整理するとすれば、次のような点ではないかと思います。一つは教員養成を前提にしても、専門教科、つまり西洋史あるいは経済学などの専攻科目の学習・研究にしっかり取り組むことを重視すべきとする方向です。今一つは、教員養成においては地理学、政治学といった個々の科目の学識以外に、社会科教育法こそ着実に学ぶべきとする考え方です。前者の考え方といえども社会科教育法を軽視するわけではなく、専攻科目のしっかりした学識を身につけることこそその近道と考える点に特徴があります。後者の考え方は、専攻科目のしっかりした学識を身につけるのは、教育学部の課題ではなく、文学部なり経済学部なりそれぞれの専門学部の仕事であろうと考えるものです。

上に述べた二つの考え方は、本学社会科学科の運営を通して、私の赴任当時から今日に至るまで常に対峙してきたといえるでしょう。ただ、すでに述べたようにかつて一、二社ともに「社会科教育」という専攻がなかったこと、現在はそれが立派に存立し、機能していることを考えますと、基本的な流れは前者から後者

に向かっているようです。この問題の落ち着くべきところがどこかは、「社会科教育」という科目の内容がどう変化してゆくかにもかかわると思いますが、むずかしく、重要な問題には違いありません。

3. 本学の変遷で思うこと

私が赴任した頃や学生として在籍していた頃の本学と、現在とを比較して驚くべき違いがあります。それは上に述べた社会科学科の変容とも大いに関係があります。本学は戦後、京都学芸大学として発足、その後京都教育大学と名称変更されましたが、一貫して教員養成を目的とする大学、学部であったことはいうまでもありません。しかし私の学生時代、新任当時、学生や教員の多くが本学の課題と考えていたことは、本学をいかに教員養成大学でない大学にするかということであったように思います。教員養成大学でありながら教員養成大学でない大学になるとは、まさに矛盾ですが、教員養成を専らにした戦前の師範学校のあり方に対する反省があったようです。私の想像をまじえていえば、教員養成という比較的狭い目的に視野を限って戦前の師範学校が運営されたことが、戦争に協力的な教員を育ててしまったと考えての反省のようでした。先輩学生も、多くの先生方も教員養成に特化することをむしろ本学の回避すべきテーマと見ていたようです。ですから教育大学、教育学部を卒業しながら教員以外の道に進むことは決して否定的に見られませんでした。教職科目の単位、教員免許を取得して卒業してゆく通常の教育学士に対して、教職科目の単位を他の専門科目で代替して取り、教員免許も取得せずに卒業してゆく学芸学士という制度もあったのです。こうした傾向は本学だけのことでなく、全国の教育大学、教育学部にある程度共通する傾向でもありました。

教育大学、教育学部の目ざすものが、近年、上に述べたかつての傾向とは全く逆になってきたことは周知のとおりです。教員養成という本来の目的にいかにかつて特化するかが教育大学、教育学部の新たな課題となつてすでにかなりの期間が経過さえています。私はかつての傾向、現在の傾向、いずれもあえて否定も評価もませんが、かつての傾向、そうした傾向が存在した事実に対する認識は必要だと考えています。数年前のことですが、文科省のさる高官と、トップクラスの人でしたが、会食した際、この話をしましたところ、全くご存じありませんでした。ただ大変興味は持ってくれたようです。教育大学、教育学部の本来のあり方、教員養成のあるべき姿には、もとより多くの要因が影響しますが、それには時流や世相の変化が強く反映されることを感じずにはおれません。

学校園のための栽培園づくりと つみきハウスの建築

産業技術科学科教授 土屋 英 男

学校園のための栽培園づくり

現在、F棟講義室の南側にさほど広くはない野菜畑があります。「栽培実習」と「食農教育の実践」という授業の実習畑として利用しています。詳細は不明ですが、ここにはもともと花壇があったようです。しかし私が赴任した20年前にはすでに花壇としての利用はなく、当時理学科におられた橋本先生が最も東側の土地を野菜畑として利用されていました。橋本先生が転出されてからは野草の地となっていました。

その頃「栽培実習」は附属環境教育実践センターの圃場を使って、センターの先生と共同で授業をしていました。この圃場は、現在もそうですが「農家」と同様の栽培法が実践・管理されていました。すなわち、必要な時期に化学肥料を与え、農薬を施用する栽培です。もちろん、これはこれで良いのですが、「栽培実習」の授業でこうした栽培法を行うのに、個人的には疑問を感じていました。

この授業や「食農教育の実践」の授業は、幼稚園や小学校の生活科、総合的な学習での栽培、中学校技術科での栽培を指導できる資質を修得するために、学生に栽培を体験的に学習させることを主な目的としています。幼稚園や小・中学校での栽培園では、栽培している作物に病害虫が発生したり畑地に雑草が生えてきても、子ども達の健康被害や安全を考慮して、ほとんどの学校園でそれらを防除する農薬の施用は控える状況にあります。学生諸君には、農薬の不要な栽培の仕方を身に付けさせ、学校現場で活かして欲しいと私は願っていました。約10年前に環境教育実践センターの先生から、授業の実施曜日を移動したいとお話がありました。その時間帯に私は別の動かせない授業が入っていたこともあり、これを機に新たな土地で野菜の無農薬畑を作り、そこでの授業展開を考えました。目を付けたのが現在のF棟南側の畑地です。

私は、大阪教育大学で非常勤講師として栽培の実習授業を担当しており、そこで20年以上、無化学肥料・無農薬の栽培を続けてきました。この栽培法のノウハウは熟知しているつもりです。これを本学でも再現を試みることにしました。まずは実習に十分な広さの栽培農地の確保、すなわち拓殖実習から始めました。橋本先生がかつて使われていた5m四方の狭い畑の西側



1 キュウリのネット用杭を打つ
汗がしたたる

の地に敷かれていた舗装用プレートを撤去し、そこに土壌を入れ、その下の土とともに耕して枯葉や米ぬかなどの有機物を大量に施用し、その周りをおかきしてJRが使用した枕木で囲みました。現在、畑地は西側の民家近くまで拡張していません。畑の南側には大きなケヤキの木が植わっていますが、そ



2 中耕除草（耕して草を取る）
腰が痛い



3 伏見甘長トウガラシの収穫
美味しそう

の周辺には鳥が運んだ種子から生えた雑多な樹木が長年の間に大きく繁茂し、畑地を暗くし風通しも悪くなっていました。これらの木を伐採する開拓を続けた数年間、学生諸君は過酷な肉体労働にもかかわらず、文句を言ったのは半数程度で、むしろ楽しそうに開拓を続けてくれました。おかげで畑地の周囲は明るく、風も通り乾燥して、作物の生育が良くなると同時に、それまで大量に発生していた蚊が激減しました。現在、開拓地は畑らしくなり、学生諸君は学校の栽培園を模した作物栽培の実習に、汗を流しています（写真1～3）。

ここで採れた完全無農薬・無化学肥料の有機野菜は安全・安心で味も良く、日持ちもします。「食農教育

の実践」をするために、学生は収穫物を教室に持って入り、すぐに調理して食べます（写真4、5）。野菜が嫌いだったのに、自分の栽培した野菜は食べられるようになる学生もいます。また、冬に有機物を大量に畑に施用することで、同じ種類や近縁種の野菜を同じ場所で続けて栽培すると作物の生育が不良となり収穫できなくなる、いわゆる連作障害が生じにくくなります。このことは、栽培畑が限られた面積しかなく、同種や近縁の実習題材（作物）を繰り返し栽培しなければならない学校農園では大いに意義あることです。本学の学生には、この実習で学習したことを、赴任校での栽培の授業に、ぜひ役立てて欲しいものです。



4 採れたての野菜を炒める
よい香り



5 野菜カレーにして食べる
美味しくて幸せ

つみきハウスの建築

上記の畑を開墾するに当たり、当初は収穫物をすぐに調理できる建物が畑の近くにあったら良いのにと考えていました。素人でも簡単に建てられる「つみきハウス」があることを知って、これを畑の南側の開拓地に建てられないかと画策しました。詳しい経緯は省きますが、最終的にこの計画は没となり、建設地は生協喫茶（スバル）と保健管理センターの間にある中庭になりました。しかしこの建設は、資金面や京都市の建築許可などで難航し、結局4年もの月日を費やしてしまいました。この間、学長先生や施設課の方々に多くのご支援をいただきました。紙面を借りて感謝申し上げます。

つみきハウスは文字通り、長さ30cmのつみき状の木片を柱の間で組み、積み上げて壁を作り、最後に屋根を張って仕上げます。つみきは、スギの間伐材から作ります。このつみきを組むのは子どもでもできるので、今回は小・中学生と大学生が共同で、広さ約7.5畳の一軒のつみきハウスを作ることになりました。

平成24年1月に、基礎の上に土台を載せることから始めました。ハウス作りに携わったのは附属桃山小学校の児童7名と附属桃山中学校の生徒3名、産業技術科学科の学生2名および桃小の保護者と教員各1名、それに私の計15名です。最初は失敗が続きもた



6 みんなでつみきを積んでいく
最初は慎重に

ついたものの、慣れるにつれて作業が順調に進むようになり、1日で壁が概ね8割方完成しました（写真6～8）。

翌25年の春に屋根、夏に窓と入口、床および内装が完成しました（写真9）。ハウスは屋根を除くすべての面が木材で囲まれた落ち着いた雰囲気、内部には少し上等な机2つとイス8つがあり、壁にはハウスができるまでの子ども達や学生の活躍を紹介した写真パネルを展示してあります（写真10）。この冊子が

出る頃には、これは本学唯一の木造手作りハウスとして供用されていることでしょうか。完成までにやたらと時間が掛かり、当初の目的とは異なりましたが、このハウスが学生諸君らの気分転換、憩いの場として利用され、京教大の名所の一つとなることを、願っています。



7 だいぶ慣れてきた
もう1人で積めるよ



8 女の子も脚立に上って力仕事
木槌の使い方もお手の物



9 入り口を除いて完成
山小屋の風格



10 床も壁も木材仕上げ
壁には子ども達の頑張りも展示

学校の文化環境

附属京都小中学校（初等部）副校長 戸田和樹

「人」が、絵画を描き、物を創り、言葉を想像してきた過去を振り返るなら、次代を担う子どもを育てる「教師」たるものは、必然的に豊かな文化創造者でなければならない。「教師」の教室で発する言葉や教室の掲示物一つひとつが子どもの教育環境であり、その創造性が日本の文化を根底から支えるものなのだ。

例えば、学級で発行される学級通信にもそれぞれの教師の個性が反映され、タイトル一つとっても「ビー玉」であったり「ぐんぐん」であったり、教師が学級や子どもたちに願う成長の姿が反映されている。また、その内容も単なる保護者へのお願いやお知らせではなく、子どもの作文や詩、教師のエッセイ、子どもの学習ノートなど、教師の思う言葉文化が溢れかえっている。こうした教育環境に囲まれて育つ子どもたちは、知らないうちに豊かな言語刺激を受け、将来花咲かせることに違いない。

教育環境の効果というものは、即効性はなくともじわじわとまるで地面に水がしみこむがごとく表れてくるものである。



本校の職員室前の廊下には、子どもの書いた詩、俳句を掲示するコーナーや季節に合わせた詩人の詩を書き込む黒板が設置してある。新鮮な言語環境を提示し

ようとする試みで、次から次へと作品を書き換えていくことはなかなか困難なことではあるが、子どもたちが時々立ち寄り音読していく風景は学校として好ましいものに思えてくる。

また、正門前には前校長の山崎正義先生作の銅像「おはようの像」があり、いつしか子どもたちは「おはようの子の像」と呼ぶようになって、親しまれている。

2011年度、本校同窓会の援助を受けて、長らく放置されてきた絵画の修復を行い、芸術館にギャラリーを整えた。

そこには、本校先輩の描かれたかつての学校の姿や浜田昇児、水瀬公子など著名な画家の作品もある。

その中に際だって大きく、薄汚れた作品があった。三谷十糸子画伯の「夏」という作品である。この作品は、本年度、堂本美術館で催される秋期特別企画「京都ゆかりの女流画家 その麗しき世界」に展示される予定である。

こうした教育文化環境を整備し、美しいものを美しいと捉える心を養っていくことも学校の大事な機能である。その根本はやはり「人」にあると私は考えている。「人」を育てるためには感性豊かな「教師」が必要なのである。



日英サイエンスワークショップ(SW)2013の取り組み ～グローバルな科学技術人材育成のために～

附属高等学校副校長 市田 克利

今年も日英SWの季節がやってきました。平成16年から毎年日本と英国とで交互に開催してきましたが、日本開催は毎回ちょうど一年で最も暑い時期と重なります。今年は連日猛暑日の中、京都大学を会場に日英合わせて45名の高校生が参加して開催されました。ワークショップ自体は8月5日(月)から9日(金)の5日間ですが、最先端の科学を英語で学ぶというハードルの高いワークショップの研修がスムーズに行えるように、事前に日英生徒の人間関係作りをするための事前交流を毎回行っています。今回は、8月4日(日)に行いました。日本人生徒が、英国人の宿泊しているホテルに迎えに行き対面した後、研修グループごとに京都観光に出かけました。日本人生徒がコースを予め計画し、神社やお寺を巡りながら案内します。また、ショッピングの手伝いをしたり、昼食を一緒にとったりして、少しずつ相互理解が進みます。今年は、全グループが時間差をつけて伝統的な木版画工房を訪問し、木版画の印刷体験をしました。自分の刷った版画はよいお土産になりました。



翌日からワークショップが始まり、午前の京都大学百周年時計台記念館での開講式後、午後から6つのテーマに分かれて研修がスタートしました。研修テーマは次の通りです。

テーマ1 「蓄電池における工学材料の科学」

テーマ2 「構造物の振動の測定と制御」

テーマ3 「生体関連物質の高性能マイクロスケール分離」

テーマ4 「生きたゼブラフィッシュを用いて私たちのからだの発生機構を調べる」

テーマ5 「有機物質や高分子材料の精密合成～材料を思い通りに合成するにはどうすればよいか～」

テーマ6 「最大最小の物語」

テーマ1～5は物理、化学、生物などの理科のテーマですが、テーマ6は、今回初めて設定した数学のテーマでした。



参加した高校生は日英共にとても熱心に研修し、最終日の公開発表会(於: 京都大学医学部芝蘭会館稲盛ホール)では、どのグループも日英生徒が協力しながら素晴らしい発表をしてくれました。発表後の質疑応答でも日本人の高校生が英国人の高校生に負けずに活発に質問していました。これまで、言葉の面でハンディを負っているためか、ともしれば日本人の高校生が質疑応答に参加できないことがありましたが、今回はその問題もほとんどなく、充実した発表会になりました。6月と7月に実施した日本人生徒のための事前学習会で、英語によるプレゼンテーションの行い方を専門家に指導してもらった成果が発揮されました。





日英SWでは毎回夕食後の時間を利用して、文化交流や過去の参加者の話を聞く機会を設けています。今回は8月5日(月)に日本人生徒による英国人生徒のための「日本語レッスン」を行いました。先生役の日本人生徒の指導のもと、英国人生徒は大きい声でレッスンに取り組んでいました。

8月6日(火)には「文化交流会」を開催し、日英双方の生徒が自国の文化を紹介し合いました。最初は緊張していた日英高校生も、このあたりから笑顔がこぼれ、随分距離が近くなったようです。

8月7日(水)には、平成18年と平成22年に日英SWに参加した本校の2名の卒業生に来てもらい、「日英SWで学んだことが今の自分にどのように生きているか」という内容でプレゼンテーションをしてもらいました。話の後の質疑応答では、日英双方から活発に質問が出ました。2人の大学生は、現役の高校生にとってのロールモデルになったと思います。約10年続けてきた日英SWがますます深化した取り組みになってきたことを示すものとなりました。



最終日8月9日(金)の夜、閉講式の後の送別ディナーでは、研修と発表を共に終えた後の達成感や連帯感で、日英高校生が時間を忘れて語り合っている姿があちこちに見られました。飛行機の関係でホテルにあと2泊する英国人生徒が、ホテルの玄関に両側に並んで日本人生徒を一人ずつ見送ってくれました。お互いのアドレスを交換した日英高校生の未長い交流が続くことを期待したいと思います。

SSH(スーパーサイエンスハイスクール)では世界で活躍できる言わば「グローバルな科学技術人材」を育成することも求められています。これまで9回実施してきた日英SWは、まさにそのような人材を育成するための効果的な取り組みであると思います。生徒たちは一人一人自分の持てる英語力を最大限駆使して、コミュニケーションを取りながら最先端の科学を共同で学びます。そして、議論しながら学んだことをまとめ、共同で発表するというサイエンスの面を縦糸とすると、寝食を共にしながら、自らの文化を説明し、相手の文化を理解しようとする異文化交流の面が横糸になります。このように重層的な取り組みである日英SWは回を重ねるごとにますます充実してきました。これからも日英双方の大勢の方々のご支援でこの取り組みが継続し、一層発展しますことを願っております。



「働く」力を育てるために～職場体験実習の取り組み～

附属特別支援学校副校長 高岸正司

私たちの学校は、豊かな学習環境を活かし、小学部から高等部の一貫教育の中で「あそびから働く生活へ」を軸に教育課程を考えてきました。

現在、多くの学校教育現場でキャリア教育ということがよく言われるようになりましたが、本校では長くこの観点で教育課程を考えてきたと言えます。

小学部段階では、あそびを通して、人とかかわること、体を動かすことの喜びを知ります。中学部になると、友だちと一緒に道具を使い、様々なものを作り、使います。

高等部になると、バザー等で販売する製品作りや屋外でのたけの子山の整備等を通して、「働く人」としてより社会性の高い課題に取り組みます。

そして、そこで培った力をもとに、高等部2年から、一人ひとりに応じて、職場体験実習に取り組み、自分の進路を選択・決定していきます。

この夏休みにも、高等部2年・3年生がたくさんの職場体験実習を体験してきました。今回は、2年生の様子をお伝えします。

京都老人ホームでの職場体験実習

京都老人ホームには本校の卒業生が4名、就労しています。3学期にある高等部の進路学習「ようこそ先輩」の授業では、ここで働く先輩が、働いている様子を撮ったDVDを使いながら、在校生に卒業後の生活について伝えてくれました。

在校生が実習にくると、先輩たちもいつも以上に張り切り切ります。後輩たちも、先輩がいることで、安心して実習に取り組めることも多いようです。

京都老人ホームでは、厨房の仕事に二日間取り組みました。最初は、オリエンテーションから始まります。「実習で気をつけること」として、「挨拶、返事、言葉遣いについて」「手洗い、清潔について」等、実習で必要なことを学びます。

作業内容は、老人ホームの利用者の方の昼食作りが主で、おかずの盛り付けの仕事、盛り付けが終わった弁当を宅配用の箱に並べていく仕事、箱をどんどん積み上げていく仕事と、ていねいさと根気強さが求めら



れます。

一日仕事のたいへんさを実感するとともに、なによりも自分もがんばれたという自己肯定感をもつことが大切です。

大学附属図書館での職場体験実習

本校では、自分たちに身近な京都教育大学を生徒たちが「働くこと」を学ぶことができる場として位置づけ、10年程前から、生協の食堂や図書館での実習に取り組んできました。

今年度は、夏休み期間に、新しくなった附属図書館で2年生が、二日間の実習を行いました。

作業内容としては、本の天（上）に蔵書印を押す、雑誌の表紙に蔵書印シールを貼る、雑誌を並べる等の様々な仕事があります。

また、カウンターで、「返却ですか」と言って本を受け取ったり、貸出の本を返却日カードを挟んで、「ありがとうございます」と渡したりする仕事もあります。

「位置を確認して貼る」「相手に言葉でしっかりと伝える」等、大切な学習をする場になっています。

最後に

人は、生活するためには、「働く人」にならないといけないということはもちろんですが、それだけでなく、「働く（労働）」という営みの中には、人を発達させる多くの要因があります。人を介して物に働きかけの中で、物の属性、働きかけ方、人とのかかわり方等、様々な力を獲得できます。そして、働くことの中で、人と共に活動することの楽しさ、人の役に立つことの喜び、自分でいろんなことができていくことのすばらしさを実感します。現実の「働く」現場は、そうならないことも多いかもしれません。

しかし、教育という営みの中で、上記のような「働く」経験を充実させていきたいと考えています。

「僕、ここで働きたいです」「給料をもらっているいろんなことがしたいです」等、生徒が卒業後の「思い」を育て、そして卒業してから、社会の中で生き生きと暮らしていけることを願っています。



子どもらしいものの見方、 考え方の世界を知りたくて

教育学科准教授 田 爪 宏 二

本年度4月に教育学科に着任し、発達心理学、教育心理学実験等の科目を担当しています。京都の歴史と文化の中で教育や研究に取り組めることを非常に嬉しく感じております。主な研究分野は、認知的情報処理のメカニズムとその発達で、また最近では子どもの認知発達に関する教師の実践知の特徴など、教師の専門性やその成長についても興味を持っています。

ところで、禅の言葉に「三千世界は目の中にあり」というものがあります。落語「菟蓐問答」の台詞としてご存知の方もあるかも知れません。これは、世界は「目の中」、すなわち心にあるものである、つまり同じものでも心の在り様で違って見える、ということの意味を、人間の、とりわけ子どもの心理を考える

上で非常に示唆的です。すなわち、心の発達の初期段階にある子どもたちは、単に幼いというだけでなく、大人とは違う独自の見方、考え方やルールを持っていて、そのような子どもらしい素敵な心の世界を心理学の立場から明らかにしたいという気持ちが、研究の大きな動機づけになっています。実験的な場面だけでなく、幼稚園や学校など子どもの生活の現場で触れ合う子どもの姿からも、日々新たな発見と驚きがあります。

また、多くの学生が教職をめざす本学の授業においても、子どもの心の世界を積極的に理解し、関わることの出来る人材を育てることを目指しています。今後ともよろしくお願いいたします。

「声」という楽器

音楽科准教授 田 邊 織 恵

平成25年4月より音楽科に着任いたしました、田邊織恵（たなべ おりえ）と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

私は音楽の中でも、誰もが持っている“声”という楽器を使った「声楽」を専門としています。

全く同じ顔の人がいないのと同じように、声も、皆それぞれ違うオリジナルなものです。また、持ち運びも楽で、誰もが演奏できるとても有能な楽器です。しかし、身体の中にあるものなので、それを自在に操り、思うような声を出すのは容易なことではありません。

その声を、自分のイメージするものに近づける為の技術として、身体のどの部分をどのように意識し、どんなイメージを持って表現するのか、それを裏付ける呼吸法や言葉、作品の時代に応じたスタイル等を学びながら、一人一人の楽器（声、身体）と向き合い、共に探りながら、音楽や歌の持つ力、喜びを感じてほしいと思っています。

私自身、現在もソプラノ歌手として演奏会やオペラに出演していますが、身体が楽器である声楽は、自分の年齢の移り変わりとともに課題も変化し、一生勉強です。学生と共にその可能性について深く追求していきたいと思っています。



『学びと成長を大切に！』

教育支援センター教授 池田 忠

本年四月、教育支援センターの特任教員として着任致しました。

京都市教員としての第一歩は、京都市立弥栄中学校英語科教員（現京都市立開晴小・中学校）であり、その後3校を勤務した後、京都市教育委員会生徒指導課に、通算9年間お世話になりました。その間、京都市立下京中学校開設準備室指導主事（兼職）をはじめ、初代子ども支援専門官として、京都市児童相談所支援課担当課長補佐（併任）にも就かせて頂き、教育と福祉の両面で、子どもや保護者はもちろん学校現場を、支援・指導する大変貴重な経験もさせて頂き、顔の見える関係・声を掛け合える関係そして重なり合う連携の大切さを、学ばせて頂きました。

そしてこの度、京都府師範学校を受け継いだ輝かしい歴史と伝統を有する本学で、12年ぶりに「教える機会」・「学生の前に立つ機会」を頂き、あらためて嬉しく思うと同時に、身の引き締まる思いで一杯です。

厳しい学校現場の状況を踏まえ、「子どもや保護者・地域の方々そして同僚から信頼される骨太教員・学び続ける教員」、「京都はもちろん日本の教育を支え、リードしてこられた偉大な本学の先輩教員の方々と同じく、これからの新たな学びを支え、展開でき、即戦力として活躍できる教員」の育成の為に、学生と一緒に努力を続け、成長して参りたいと強く考えております。

どうぞ、よろしく御願い致します。

向上心が自分を変える

滋賀大学教育学部附属小学校 教諭 **橋 詰 加 奈**
(国語科教育専攻 平成18年度卒業生)

魅力ある教師とは何か。きっと子どもの心をとりにする『何か』を持った人にちがいない。けれど、当時、初任者だった私は意気揚々と教壇に立ったものの、魅力ある話題を提供できない自分に憤りを感じていた。ごく平凡な私はどうしたらいいのかと悔やみ、なぜ在学中にもっと旅行に行ったり趣味を広げたりしなかったのかと悔いた。在学中はクラブに没頭する日々を過ごしていたため、充実していたが多忙でもあったのだ。では、今の私がどうしたら子どもの心をつかむ魅力的な教師になれるのか。自分自身に問う毎日だった。

あるとき、ふと思った。どんなに悔いても私に特別な『何か』はない。ならば、他の人の特別に変わる『何か』を今から身につけるしかない。経験を積み、先輩から学び、実践を重ねていけば、魅力ある教師になれなくても魅力的な授業はできるのではないか。今の苦労や工夫がきっと自分の肥やしとなるはずだ。そう感じた私は、すぐに授業改善に努めた。私の意識が

変われば子どもの反応も変わる。自然と授業中の言葉にも熱が入る。次第に子どもの笑顔も増え、生き生きとした様子が見えてきた。多少の手応えを感じ始めた私は、この向上心が私自身を成長させると信じて、実践研究を積み重ねていった。そのおかげで、今でも本学の国語学会や研究会の場で実践発表の機会をいただいている。多くの方に評価されることで次のステップへ進むチャンスが広がった。新たな活力となり、さらなる飛躍につながる向上心を生み出したのだ。

もちろん、教師8年目になった今も、未熟さゆえの葛藤や理不尽さがあり、試行錯誤の毎日である。けれど、だからこそ輝かしい成長を遂げる子どもたちの笑顔に刺激と癒やしを受け、共に成長し続ける前向きな自分でありたいといつも願う。そのためにも、あくなき向上心を持ち続けたい。

向上心さえあればいい。思い立った瞬間、その向上心が自分を変えるのだ。

大学での自分自身を振り返って

ノートルダム学院小学校 常勤講師 **大 江 太 津 志**
(英語教育専修 平成24年度修了生)

小学校の先生になりたいと強く思い始めたのは高校生からでした。友達が作れず学校をさぼりがちになった私の唯一の居場所は、小学校のときから習っていた空手の道場。空手の指導に携わることを通して、小学生がちょっとずつ成長していく姿に感動するだけでなく、私自身が彼らのために何か役に立っているのではないかという効力感も感じていました。

教員を目指して本学に入学しましたが、正直なところ高校時代うまく友達を作れなかった私が、子どもとうまくコミュニケーションできるのか自信がありませんでした。「人と接するのは苦手だけど、それでも先生にはなりたい！」こんな葛藤を持ち続けていました。

模擬授業や教育実習など教員としての資質に関わる活動もたくさんさせていただきましたが、コミュニケーションへの苦手感が克服できなかった私にとっ

て、卒業論文への取り組みが、中でも特別な体験だったと振り返って強く感じます。英語科のみんなと夜遅くまで演習室に残って一緒に勉強したり、内容について話し合ったり、ときには休憩して談笑したりしながら、卒論執筆を励まし合いました。この演習室が私にとってとても心地よい場所でした。卒論を書き進めることには困難を極めましたが、一緒にいて楽しいと思える仲間がいたからこそ、しんどいことも心地よく思えたのでしょう。自分の苦手意識が転換するきっかけとなったのは、間違いなくこのときでした。

念願だった小学校教員として教育に携われることに、今とても大きな充実感を味わっています。私に教員として大切な資質である「人と喜んで関わろうとする心」を育んでくださった先生方と学友たちに心から感謝しています。

思い出と近況報告

京都教育大学名誉教授 川口 容子

私は、本学に、音楽科の器楽担当教員として昭和49年に採用され、平成20年に定年で退職するまで、34年間奉職しました。その間のことを振り返ってみますと、思い出すことは沢山ありますが、その断片をいくつか綴り、近況報告と合わせて、依頼された本欄の埋め草にしたいと思います。

昭和49年当時は、煙突のある演奏室で冬には石炭（?石油）ストーブを焚いていたように思います。無論、冷房機器は設置されておらず、その上、授業に使っていたD棟1階西側の研究室には網戸がなかったものですから、夏は蚊を避けるため窓を閉ざして汗だくでレッスンをしました。その時の学生達とは今でも毎年同期の集いに、私を招いて下さり、演奏会には聴きにきて下さるとい関係が続いています。現在、附属桃山小学校の副校長を務めておられる西井薫さんは、その中のお一人です。演奏室は、その後程なく建て替えられて、冷房設備が設置されました。日本が貧乏な国から豊かな国に変貌した時代の一コマです。定年半年前から、耐震工事のための校舎のリフォームが始まりました。完成したのは、退任時でしたので、全部は見えていませんが、音楽練習室も充実したと伺っています。

墨染交響楽団を立ち上げた情報音楽専攻（当時）の子吉信成さんや米田勇樹さん達が、第3回の定期演奏会では、「川口容子先生退任記念演奏会」を開催して下さい、私にとって記憶に残る演奏会になりました。

アウトリーチ活動として始めた附属高校生のためのレクチャーコンサートは、社会科の井上達朗教諭、英語科の高田哲朗教諭のお世話で、退任まで10年間続きました。忙しい本業の合間に行うボランティア活動は、精神的にも身体的にもきつかったのですが、私のfaculty developmentの個人版で、音楽をすることの喜びを伝えたい、それこそが音楽教育の原点であるとの思いからでした。優秀な生徒さん達が熱心に参加され、忙しい勉学の合間の練習でありながら、見事に仕上げていく様子には活力を頂きました。その中から本学音楽科へ進学した人もいたことは嬉しいことの一つです。

在職34年の間には、海外との交流も盛んになり、研究者が来られたり、自らも演奏に招かれたりしました。思い出深いのは、歴史ある南京でのリサイタル、セキュリティー厳しいアメリカ国務省内ホールでの演奏会、当地の新聞で高評を頂いたドイツ・シュバルツ

バルト博物館でのリサイタル、冷たい石畳を歩いて行ったスイス・フィッシンゲン修道院での室内楽、現代音楽に興味を抱かせたドイツの作曲家P.M. Braunの作品4曲の初演などです。スイス、チェコ、ドイツ、中国、アメリカの31都市で演奏しましたが、この経験は、人としての幅を広げ、私の教育の泉を枯渇させないでくれたように感じています。

退任後は、母校の武蔵野音大同窓会の支部長を務めたり、京都音楽家クラブ理事として音楽家の方々のお世話をしたり、京都リレー音楽祭で室内楽を演奏したり、日瑞音楽交流演奏会でスウェーデンの方と共演したり、そして自宅でサロンコンサートや勉強会を開催しています。また年1回、附属桃山小学校のゲストティーチャーに招かれクラリネット奏者の娘と「クラリネットとピアノの魅力」を紹介させて頂いています。授業が終わった後の生徒さんの感想文は、こわごわ読みますが、喜んでもらえる、更にバージョンアップしようという励みになります。本年1月にはこうした長年の教育活動や、国内外での活発な演奏活動を評価して下さい、京都の洋楽界で顕著な活動を行った音楽家や団体を顕彰する「第32回藤堂音楽賞」を、京響指揮者の広上淳一氏と共に受賞しました。

演奏活動は、これからも続けたいと思っており、今も時間のある限り、音楽と向き合いピアノを練習しています。'The art of living well and dying well are one' というのが老年学の教えるところですので、日々老化の進行を自覚する毎日ですが、目標を持って気負わず焦らず歳相応の表現を追求していきたいと思っています。

紙幅が尽きて書けなくなってしまいましたが、京都教育大学から離れてみると、当たり前と思っていたことが実はとても恵まれたことであったということにいろいろと気付かされます。最後になりましたが、この大切な大学の発展を心から願っております。



私にとっての第一期生の皆さんが藤堂音楽賞受賞をお祝いして下さいました。

第 132 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学総務・企画課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

132 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 132 号をお届けいたします。本号の特集は『学長就任の挨拶』と『新図書館、建つ』の二本立てです。

今春、本学の長年の念願であった附属図書館増築・改修工事がついに竣工しました。特集では、広く明るく生まれ変わった附属図書館を、今日までの歴史とともに紹介しています。これからも、京都教育大学附属図書館が地域を支える情報拠点として愛され、ますます広く活用されることを願っています。

なお、今号の表紙を飾るのは附属特別支援学校の海野匠未さんの作品、裏表紙は同じく附属特別支援学校の奥田昌史さんの作品です。それぞれの表情豊かな作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀

ひとりで悩まないで！

知っていますか？
DVのこと

DVとは、夫婦や恋人
などの、親しい男女の間で
起こる暴力のことをいいます。

京都府では、被害者が安心して
相談できる環境づくりと、
DVを許さない社会づくりを進めています。

京都府府民生活部男女共同参画課
TEL 075-414-4291

<http://www.pref.kyoto.jp/josei/dv13.html>



地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀					
副委員長	丹下 裕史					
委員	濱田 麻里	齋藤 正治	西村佐彩子	吉江 崇	相澤 雅文	
	平井 恭子	Andrew Obermeier	丸山 啓史	佐藤 忠司		
事務担当	総務・企画課					



京都教育大学広報 第132号

発行日
2013年10月31日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>